

(十一月三十日(木))

コラム音読 ⑨

夕方のバス停でのこと。中学生らしき制服姿の女の子たちの会話が耳に入ってきた。「きのうさー、先生にさあ、ポロクソほめられちゃったんだ」。えっと驚いて振り向くと、楽しい笑顔があった。若者が使う表現はなんとも面白い。

「前髪の治安が悪い」「気分はアゲアゲ」。もっと奇妙な言い方も闊歩(かっぱ)する昨今(さつこん)だ。多くの人が使えば、それが当たり前になっっていく。「ポロクソ」は否定的な表現として使うのだと、彼女たちに諭(さと)すのはつまらない。言葉は生き物である。

今から百年ほど前の大正時代、「芥川龍之介」は著書『澄江堂雑記(ちようこうどうざつき)』の中で次のように書いている。東京では「とても」という言葉は「とてもかなわない」などと否定形で使われてきた。だが、最近はどうしたことか。「とても安い」などと肯定文でも使われている、と。

今どきの若者は、SNSの文章に句点「。」を付けないとも聞いた。「。」を付けると冷たい感じがするらしい。日本語の歴史を振り返ると、元々日本語には句読点「。」、「、」がなかったのを思えば、こちらは先祖返り(せんぞがえり)のような話か。

新語は次々と生まれても、その多くが廃(すた)れていく。さて「ポロクソ」はどうなることか。それにしても、あの女の子、うれしそうだったなあ。いったい何を、そんなにほめられたのだろう。



(十二月七日(木))

コラム音読 ⑩

地球外生命体はどんな姿か。タコ型やヒト型など昔から作家や科学者たちが想像をたくましくしてきた。

「命の痕跡(こんせき)を探す」という言葉を聞くと、誰もがわくわくする。二〇二二年二月一日、米航空宇宙局(NASA)の探査車(たんさしや)『パーセピアランス』が火星の着陸に成功した。かつて湖だったと考えられる場所で、微生物のあとが残っていないかを2年かけて調べている。

当時、着陸時の動画も公表され、火星の赤褐色(せつかくしよく)の地表に向かい、あと300メートル、20メートルと、見ている者も一緒に下りているような気分になった。一般の人たちから募集した探査車の名前は、『忍耐』を意味する。同じく名前の候補に選ばれたプロミス『約束』などが外れたのは、約束できるほど簡単な任務ではないからか。

火星に生命体があるという見方は、勘(かん)違いから始まった。十九世紀に望遠鏡で観測したイタリア人が地表の模様(もよう)を『溝』と表現した。それが英語『運河』と誤って訳され、『運河があるなら火星人がいるはず』となった。近年、水の存在がほぼ確認され、再び生命探しが熱(あつ)帯(お)びている。

たとえどんな形の命が見つかったとしても、なかまだと思いたい。ちょっと気が早すぎるかも知れないが。

